

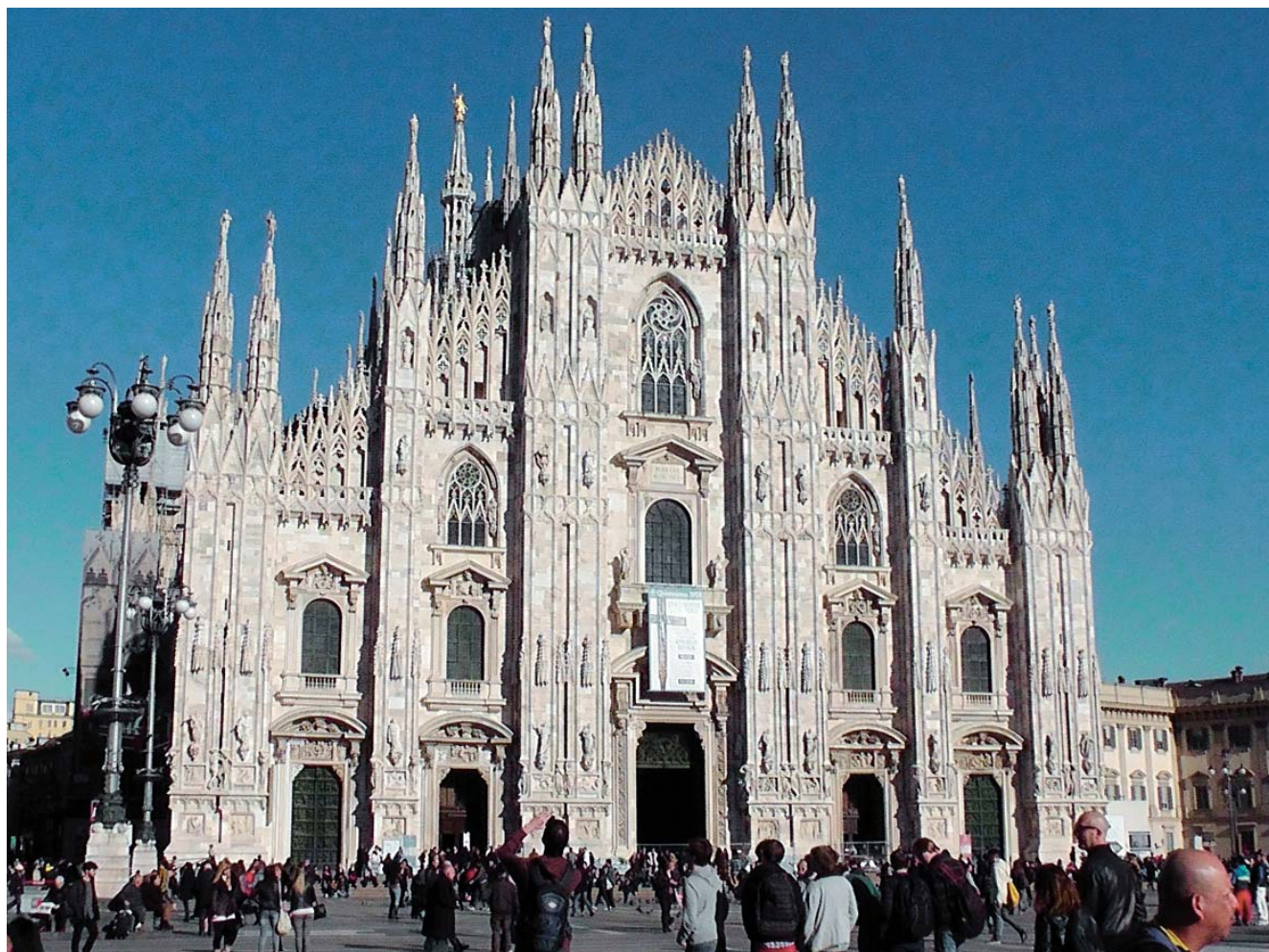
---

# 図書館だより

都城工業  
高等専門学校  
図書館

No.78

FEBRUARY 2016



「イタリア ミラノ大聖堂（ドゥオーモ）」

**特集**

## 校内読書感想文コンクール入賞者発表

---

都城工業高等専門学校

National Institute of Technology, Miyakonjo College

---

まずは、短編から	図書館長	西村 徳行	1
高専での研究と読書	機械工学科	河野 行雄	2
いつ読むの？ 今でしょ。	電気情報工学科	樋渡 幸次	3

## 特集

## 校内読書感想文コンクール入賞者発表

校内読書感想文コンクール入賞作品	4
講演会「都城の歴史あれこれ」	
講師 NPO法人 都城歴史と文化まちづくり会議 理事長 田代 義博氏	16
今年度の活動と来年度の図書委員会について	
学生図書委員長 建築学科 徳丸 唯 副委員長 電気情報工学科 宮崎 愛美麗	17
ブックハンティング実施される	17
〈ブックハンティング〉で購入した図書一覧	
第三回「深山書評」実施される	19
図書館からのお知らせ	20
図書館開館予定 学年末・春季休業期間中の長期貸出について 編集後記	



### ●表紙「ミラノ大聖堂（ドゥオーモ）」

ミラノ大聖堂は、14世紀末に起工され、19世紀初頭に完成した世界最大級のゴシック建築である。135本の尖塔があり、そのひとつひとつの頂に聖人が立っている。階段かエレベーターを使って、屋上に上ることができ、尖塔を間近に見ることができる。

撮影時期：2014年3月  
撮影場所：ミラノ（イタリア）  
撮影者：図書館長（一般科目） 西村 徳行

# まずは、短編から

図書館長 西村 徳行

私事で恐縮だが、小学生の頃の通知表の担任所見欄にたびたび書かれたのが、「飽きっぽい」という言葉だった。今振り返ると、確かに図画工作・作文などで最後まできちんと作品を仕上げた記憶がない。読書でも同様で、中学生の頃までは、これはしっかりと読み切ったという物語は数えるほどしかない。大学時代は、自宅と大学との往復で2時間以上電車に乗らなければならなかったので、長編小説を含め、さまざまな本を読むようになった。それでも、短編小説をかなり読んできたと思うが、それは「飽きっぽい」性格の所為という訳でもなさそうだ。短編の持っている独特の緊迫感、スピード感に魅了されたことが大きいと思う。読者を素早く自分の世界に引き込んで、最後の思いがけない(と言うようなものばかりではないが)結末へと導いて行く作者の技量に魅かれたということが、短編を好んで読んだ一番の理由のようだ。本稿では、私が読んできた短編の中から幾つかご紹介したい。

まずは、古典から始めたい。平安時代末期に書かれたと言われる『今昔物語』は、小説ではなく、説話集だ。因果応報的な話が多いのだが、当時の人々の生活を赤裸々に綴った話もあり、興味深い。現代語訳を参考にしながら原文を読むと、古文のリズムも味わえてよいと思うが、この説話集に想を得て、杉本苑子が著わした『今昔物語ふあんたじあ』を読んでみるのもよいだろう。古典を題材にした短編と言えば、芥川龍之介の「羅生門」・「鼻」なども名高い。芥川の短編にも一度触れてほしい。中国古典を題材にした短編としては、中島敦の「名人伝」・「山月記」も一読の価値があると思う。最近、又吉直樹の好きな作家として、再び脚光を浴びることになった太宰治にも、おとぎ話を題材にした短編がある。『御伽草子』は、4つのおとぎ話を、太宰独特の発想・語り口で、パロディ化した作品だ。

外国の作家を二人紹介しておきたい。オー・ヘンリーとサキだ。オー・ヘンリーは日本でも名高い作家であり、「最後の一片」はあまりにも有名である。貧しい人々の生活を情緒的に描き、最後にあっという結末が待っているという話が多い。日本でも短編集が数種類出ているので、是非読んでほしい。対して、サキは日本ではあまり知られてはいないかもしれない。スコットランドの作家だが、英語圏の人々には広く読まれていると思う。思いがけない結末という点では、オー・ヘンリーと共通するが、渴いた笑いと言

うか冷たい笑いと言うか、オー・ヘンリーとは違った肌触りの短編が多い。本校図書館には入っていないようだが、文庫本で出ているので、読んでみてほしい。

短編の中でも特に短いものを、ショートショートと分類するが、このジャンルからも幾つか紹介しておきたい。日本での第一人者は、何と言っても星新一だ。生涯で1,000編を超えるショートショートを書いたと言われるが、私は9割以上は読んだと思う。性描写や暴力描写が少なく、お子様向けと思われがちだが、現代の社会問題を予見したような作品も見られて面白い。私が星新一をたくさん読んだのには、学生時代の就活で、ある大手出版社の入社試験に3つの題材を使って面白い話を書くという試験があり、それに対処するためというものがあったのだが、そのくだりは、三十数年前の『図書館だより』に書いた。ショートショートと言えば、他に小松左京や筒井康隆をよく読んだ。小松左京は、長編『日本沈没』で有名だが、読み終わった後ハッとするようなショートショートも書いている。筒井康隆は、多数のショートショートを書いているが、毒のあるのはどうも、と言う人は遠ざけたほうがいいのかもしい。

最後に外国のショートショートの作家を紹介しておきたい。フレドリック・ブラウンとレイ・ブラッドベリだ。ブラウンはSFと推理小説を多数書いているが、ショートショートもたくさん書いている。図書館には単独では1冊しか置いていないが、書店には文庫本で数種類あるので、手にとっていただきたい。個人的には、『未来世界から来た男』所収の悪夢シリーズが面白いと思う。ブラッドベリは、SF界の抒情詩人と評される。映画化された長編『華氏451度』は有名だ。ショートショートも数多く書いているが、幻想的な作風のものが多い。

古い作品ばかりで申し訳ないが、今の学生諸君が読んでも、面白いと思ってもらえる作品を選んだつもりである。図書館に置いていないものが多いが、今年度揃えられるものは揃えて、4月に手にとってもらえるようにしたい。タイトルに書いたように、「読書は苦手」と言う人も、まずは短編から始めてみたらどうだろうか？

# 高専での研究と読書

機械工学科 河野 行雄

小生が都城高専に勤務するようになった1976年（昭和51年）の数年前までは、日本は高度経済成長期にあり、大学の理工系人気は高いものがありました。大学4年生になると直ぐに就職活動が始まり、5、6月頃には学生のほとんどが企業への就職先が決まっていました。高専の一昨年までの就職活動状況に似通ったところがあり、当時、早期の就職採用のことを青田刈りと呼び、これの是非についての議論がなされていました。大学・企業間では改善策が検討され、その後、大学・企業間で就職協定が結ばれ、今年度の高専の就職活動開始時期が遅くなったのと似た状況になりました。高専に勤務する3年前の1973年の秋、第一次オイルショックが起き、原油価格は4倍に跳ね上がり、当時のガソリンの価格は50円程度であったものが、一挙に2倍程度に値上がりしました。石油資源の大半を輸入に頼る日本経済は、大きな打撃を受けました。その後、日本経済が回復するまでに長い年月がかかり、就職難の暗い時代が続き、学生の理工系離れが進みました。

小生はそのオイルショック後に、都城高専に勤務するようになりますが、その頃の学校の状況は、まだ専攻科はなく、教員の仕事は、学生の教育に関するものが殆どでした。当時の都城高専の博士の学位取得者は、学校長のみで、学位取得を目指して研究している先生が数人見られる程度でした。1986年、小生は内地留学の希望が認められ豊橋技術科学大学に行くことになりました。当時は、学位取得を目指して内地留学を希望する教員が結構多く、希望しても直ぐに行ける状況ではありませんでした。ようやく、小生もこの内地留学に行く機会が得られ、これが契機となり10数年がかりとなりますが、論文博士の学位を取得する切掛けとなりました。2002年に本校にも専攻科が設置され、小生も専攻科の授業をおこなうことになった際に、内地留学で行なった研究内容、その後の大学との共同研究の内容は、専攻科生の研究指導に多いに役立ったと思っています。

在職期間中は、本を読むと言えば、専門書が主で、他の分野の本は少なかったわけですが、この4月より、本校を退職して自由な時間が増えることとなります。この自由な時間を生かして、これまであまり出来

なかったことのひとつである専門書以外の本を読みたいと思っています。幸いにも、ネット上で著作権の消滅した文学作品が無料で読める青空文庫というものがありますので、これ等を利用してこれまで本の名前は知っているが、まだ読んでいない本や、読み返してみたい本が読めればと思っています。

ここで、改めて読書の効用について、ネットで調べてみますと、

(<http://matome.naver.jp/odai/2137100216205670501>)  
以下の15の効用があるとされています。①より賢くなれる ②人生に潤いが出る ③小さい頃からの読書で能力アップが可能 ④短時間でストレスが解消 ⑤接し方を学ぶことができる ⑥心をより穏やかにしてくれる ⑦自分に自信がついてくる ⑧脳内の働きが活性 ⑨アルツハイマー病に効果的 ⑩世間知らずになってしまうのを防ぐ ⑪記憶力が向上する ⑫センス力がついてくる ⑬新しいアイデアが浮かぶ ⑭書くスキルが向上する ⑮自分を知るきっかけを与えてくれる。

読書を行なう目的は、人それぞれ違うと思いますが、読書はこの15の効用のいずれかに該当するのではないかと思います。

小生は、40年間勤務した本校をこの三月退職して高齢者の仲間入りとなる訳ですが、この読書の15の効用の中の、特に②⑥⑨の効用を目的に、今後も読書に親しみたいと思っています。

# いつ読むの？ 今でしょ。

電気情報工学科 樋 渡 幸 次

40年ほど前、都会の電車の中では多くの会社員が通勤時間を利用して新聞か本を読んでいた。それが漫画本になり、ゲーム機になり、今はスマートフォンになり、ニュースはYahooで小説はkindle電子図書でと媒体も変化しています。社会人になるとどうしても読書の時間が少なくなり、僕も専門書を除いて殆ど紙媒体の文章を読まなくなりました。専門書も、多くの場合PCで済みますので、よほど必要に駆られない限り紙の本を読まなくなりました。情報化社会とは良く言ったもので、学生の頃あれほど読みまくった小説や哲学書に割いた時間を、今は情報収集に費やしています。今は履歴書に「趣味は読書」と書くとは嘘ですが20歳代まではそうでした。中学まで大学ノートにせせと小説を書いていました。シャーロックホームズ、怪盗ルパン、江戸川乱歩をチャンポンにした様なものだったとは思います。

高専時代にはとにかく沢山の本を読みました。日本文学では二葉亭四迷から始めて、自然主義、白樺派、浪漫主義、プロレタリア文学あたりまでです。文豪達の初版本が欲しくて、古本屋で朱色の作者印が押しであると興奮しました。

花柳界を描いた永井荷風（死に様が壮烈）の作品には過激な表現もありましたが、見知らぬ世界が珍しくて読みまくりました。また、プロレタリア文学の小林多喜二より徳永直が面白いと思ったし、特に好きではなかったけど有島武雄は読み終えたらまた別の作品を読みたくなりました。作風は三様ですが、芥川龍之介、太宰治、三島由紀夫は死を選んだ作家に対する興味で読みました。谷崎潤一郎、田山花袋、志賀直哉は純文学として読みましたが夏目漱石だけは避けていました。彼の作風がVSOPに思えたからです。「我が輩は」や「坊ちゃん」等を読んだのは、村上龍や赤川次郎の時代でしたが遅すぎました。「世間ずれした心には入ってこないのだな」と後悔しました。17歳の時「若きウェルテルの…」とか「狭き門」を読んだ時には感動で体が震えたのに。トルストイやスタンダールやポーワールに比べて、カフカやカミュはムンクのイメージと重なっていたので沢山読みました。海外の長編は読み切るのに努力も必要ですが国内の「細雪」ほどではありません。それに、百田尚樹みたいに

途中で気分が悪くなることもありません。

政治思想や哲学で影響を受けたのは毛沢東やマルクスです。毛沢東語録は良質の矛盾論で読みやすく、後に宇佐美寛の「論理的思考」に導いてくれました。トロッキーやニーチェの印象も強力でした。病が哲学を生むのですから。サルトルは好んで読みました。「弁証法的理性批判」よりも僕にはその他の戯曲集が面白かった。そしてこの頃から実存主義に傾倒しました。今でもアームストロングが月に行った事には懐疑的です。兄がスミスとかケインズを勧めたけど僕は資本主義には抵抗があったので、やっぱりマルクスの「資本論」でしょ。途中で挫折しました。クラスメートは堀辰雄を勧めましたが、僕には小田実や、なだいなだのほうに分かりやすかった。一方で、成長の家の「生命の実相」や統一原理教会（勝共連合）の「原理講論」やオームの機関誌も読みました。

そもそも何を讀もうがカラスの勝手ですが、本は人を作ります。本校の1期生で工業科学科の浜島先輩。彼は20歳にして人生を知り尽くしていました。書店と全ての新刊購入契約をしていて、部屋は1畳程度の布団の空間を除いて天井まで書籍が詰まったリング箱で埋まっていました。「僕は本で人生を学んでいる」と聞いた時、本が人を作る事を知りました。否、僕だって65歳にしてPrologでの矛盾とか無矛盾とか背理法とかが面白くてたまらないし、リベラルは素晴らしいと思っている。つまり、読書は人間形成の上でとても重要で、だから、若いうちにいろんな本に触れて欲しいと考えます。ただ「まんが〇〇の歴史」も全て読んだけどあまり覚えていない。やっぱり、本は苦勞して讀んだ方が良いでしょう。

第1学年	偽りの幸せを捨てて—『君たちはどう生きるか』を読んで—	機械工学科	渡部 真将
	『人形の家』を読んで	電気情報工学科	長野 桂歩
	『人間失格』を読んで考えたこと	物質工学科	馬場 聖蘭
	ものにあふれる社会で—『檸檬』を読んで—	建築学科	外園 初音
第2学年	『老人と海』を読んで	機械工学科	渡邊 慎也
	『レ・ミゼラブル』	電気情報工学科	有馬 夕貴
	『風立ちぬ』を読んで	物質工学科	林田 美優
	十人十色の真相—『藪の中』を読んで—	建築学科	片平 千陽
第3学年	『怒りのぶどう』を読んで	機械工学科	佐多 勇亮
	『コペル君』のおなかのなか	電気情報工学科	今別府輝人
	『戦争と平和』を読んで	建築学科	草野 諒太
	<自己と他者>		
	自由を求める力—『箱男』を読んで—	物質工学科	川崎 夏鈴
	『津軽』を読んで	物質工学科	栗山 愛理
	連帯するこれから	物質工学科	新 朋香

## 校内読書感想文コンクール入賞作品

### 偽りの幸せを捨てて—『君たちはどう生きるか』を読んで—

1年 機械工学科 渡部 真将

わたしが手に取った『君たちはどう生きるか』という本の舞台は、昭和の初めのころだ。当時の人々の暮らしは、今のわたしには想像できない環境にあったことと思う。しかし、今の高校生にも共通する問題場面もたくさんあった。登場人物の一人の浦川君は、貧しい豆腐屋の長男。毎日の弁当は油揚げだけ。家業を手伝う浦川君の体には油揚げの臭いが染み付いていたため、周りからは「アブラアゲ」というあだ名をつけられ、バカにされていた。浦川君自身には、周囲の人に対して何も悪いところがないのだ。

みなさんの学校はどうだろうか。あだ名をつけられバカにされている友だちはいないだろうか。もしも、

心当たりがあるとしたら、みなさんならそれに対してどんな態度をとっているだろうか。わたしは、心の中では、「許されることではない」と思っている。しかし、実際の行動を振り返ると、それを止めることはできないだろうと思う。自分ながら弱い心が情けない。しかし、人間というのは、だれかをさげすむことで、自分に救いを求めようとする弱さをもっている。そして、それを許されないことと知りながら、正すことのできない弱さをもっているのだ。わたしは、どうにかして私の内で正しいと思うことを心の中だけでなく、実際の行動で表せる強さを身につけたい。

この物語には、北見君という正義感の強い少年も登

場している。北見君は、陰で浦川君をバカにして、悪意に満ちたいたずらを仕掛ける友達に殴りかかった。この北見君の「殴る」という行為もまた、誤った行為だと思う。しかし、困っている友だちを放っとけない、卑怯な許されない行為を何とかして正したいと思う気持ちは、とても立派だと思う。その思いが伝わり、だれかを傷つけて得られる救いは本当の救いにはならないということが分かったからこそ、北見君と浦川君は親友となり、周りの意地悪もなくなっていったのだと思う。

今、日本ではいじめに苦しむ中学生の問題が大きく取り上げられている。わたしは、その原因の多くが、特に理由もないのに、自分の満たされない想いに対して、だれかをもっと不幸に追い込むことで、相対的に幸せを感じ、救われようとするために行われているのだと思う。そして、それを「許されることではない」と知りながら、止めることのできないわたしのような弱さも、いじめがなくなならない背景になっているのだと思う。いじめにあう人は、とても不幸である。そして、いじめで救われようとする人も手にするのは偽りの幸せであり、いずれいじめを行ってしまったという

自責の思いで苦しむことになるであろう。わたしのよように止められない弱さをもつ人も自分を責め続けてしまう。偽りの幸せのために、みんなで苦しまなければならない。偽りの幸せを求めているうちは、だれも幸せになれないのだと思う。

「偽りの幸せ」という目線で自分たちの学校生活を振り返ると、いろんな問題が浮かび上がってくる。争いのない平和な学校生活は、互いに当たり障りのないよう遠慮していることで成り立っている。正しいことやよりよいことをめざしているのではなく、ただ今が平和であればそれでいいという生活のように思われる。こんなかかわりの薄い生活が本当に求めるべき生活なのだろうか。こんな薄っぺらな関係も偽りの絆になってしまうのだろう。

この物語を読み終えて、あらためて表紙を見た。「君たちはどう生きるか。」表紙は、わたしにそう問いかけている。高校生活は長いようで、短いものだと思う。このままの自分で高校生活を終えたくないと思心から思う。自分の弱さを知りながら、その弱さに胸を痛めながら生活したくはない。友達に遠慮ばかりして、強い絆をつくれな生活では終わりたくはない。

## 『人形の家』を読んで

私が学校の図書館で本を探していると

「この本が良いかもよ。」

と友達に手渡されたのが、このイブセンの作品『人形の家』だった。最初に目にした時は、作品名から人形が大好きな人が家を人形で覆う話だと思ったが、実は全く違っていた。

物語の主人公は、ノラという女性。ノラは夫であるヘルメルにずっと隠していたことがあった。ヘルメルは以前、命に関わる病気を患い、彼を助けるための大金が必要になったノラは、クログスタットという男性に借金をした。しかし、このことはヘルメルに明かすことができなかった。重病人に向かって命が危ないなどとは言えず、また、ヘルメルは自尊心が強く、借金をすることは許さないからだ。そして、借金をする場合は、父親の署名が必要になるが、その父は既に亡くなってしまったため、ノラが偽造し、法律違反をすることになってしまった。クログスタットは、ノラが犯した罪を使って脅し、ノラに自分の銀行での地位を上げてくれるようにヘルメルに頼むことを要求した。ノ

### 1年 電気情報工学科 長野桂歩

ラは必死に頼むものの、ヘルメルは逆にクログスタットを免職させる。クログスタットは仕事を辞めさせられたため、真実の一部始終を書いた手紙をヘルメルに送った。ヘルメルは秘密を知り、社会的に葬られることを恐れノラをののしる。しかし、クログスタットは、リンネ夫人という女性と手を取り合って生きていくことを決意し、証書を返して事件は解決した。ヘルメルは、助かったなどと言って再びノラの意を迎えようとするが、ノラは、

「人形として生きるより人間として生きたい。」

と願い、別れを告げ三人の子どもも捨てて家を出ていく。

ヘルメルは今までノラを愛していたのではなく、かわいがっていただけであって、ノラの苦しんでいることにも気づかず、また、真剣に会話もしたことが無かったため、ヘルメルは愛は本当の愛ではないというのがノラの言い分だった。

私はこの本の中で、ヘルメルはノラの秘密を知ってからの言動が、表面だけの愛だったことを確信した。

つらい時に近くにいるのが友達と言われるが、つらい時に一番近くにいるのが本当の夫の姿ではなかったのだろうか。実際、この話でノラが相談できたのはリンネ夫人だった。それなのにヘルメルは自分を善心でした行為を責め続けたのである。だから、最後の「別れ」という判断は一番良く、正しかったのではないかと考えた。

この本を読んだことで、とても幸せそうな夫婦にも二種類あるのだと感じた。一つ目は本当に愛し合っている夫婦。二つ目は、人形の様にかわいがったり、かわいがられるだけのものや、何かを隠していることがある夫婦。私は、自分のことを愛してくれ、また愛せ

る人を探すことができれば最高に幸せだと思う。

私は、初めてこの本を読んだが、とても特徴的な作品だと感じた。ほとんどが会話文。説明が少ししかないが、ずっと頭の中に入ってきて、内容が分かりやすかった。また、どのような場面であるかを自分で想像することができ、想像力を高められた。

この本は私に、これからの人生の大事なことを教えてくれる良き本だった。今回、読書をする事で本は自分自身が何かを考えるきっかけをつくってくれ、また想像力を豊かにさせてくれる素晴らしいものだと改めて実感した。これからも多くの本と出会い、本の良さをたくさん見つけていきたい。

## 『人間失格』を読んで考えたこと

1年 物質工学科 馬場聖蘭

『人間失格』。私はこの題名を見てもあまり心が揺らがない。しかし、本の裏表紙の僅か150字程度のあらすじに心惹かれた。「人が人として、人と生きる意味を問う。」正に今の自分が読むべきなのではないか、そう思ったのだ。元々読書が好きな私は、すぐにこの本を読み耽った。この本は私の想像以上に心の奥に染み込んできた。それは自分が心惹かれた作品であるからという理由もあると思うが、作者である太宰治が魂を振り絞り、自分の命を削りながら、自分自身を照らし合わせて書いた傑作であったからという理由の方が強いように思う。この作品のように後に名作と語られるものを書き上げる人の精神状態は、普通ではないのだということを深く感じる事が出来た。

そんな私の心の奥深くまで揺り動かしてくれた『人間失格』には、幼い頃から自分を道化にして、自らの気持ちとは裏腹に周囲を欺きながら生きてきた大庭葉蔵という男の一生が書き記されている。しかし、この葉蔵の道化は、竹一というクラスメイトによって見破られる。その後上京した葉蔵は、タバコと酒に溺れ、やがて女を糧にして生きていくことになり、徐々に転落の道へと進んでいく。自殺未遂や心中を図っても死にきれなかった葉蔵はモルヒネ中毒に陥り、脳病院を経て実家へ引き取られる。故郷へ戻った葉蔵は廃人同然になり、自分には幸福も不幸もないと悟りながら物語は終わりを告げる。皆から人気のあった自らを道化にしてきた葉蔵が転落の人生を歩んでいく。こんなにも辛い人生を送った葉蔵が自殺未遂や心中を図るのも無理はないと思った。実家へ引き取られる際に自ら自

分自身を「人間、失格。完全に人間では無くなった」と言った葉蔵の胸の内には、他人が簡単には掘り起こせないほどの溝が出来ていたように思える。そんな様子を僅か20字足らずで自分自身を照らし合わせて描写する太宰治の凄さに心がときめいた。

この作品で一番心が動かされた場面は、病院に葉蔵を一人置いて帰る時、ヨシ子が注射器とモルヒネの注射液を葉蔵に渡した場面だ。この時葉蔵はヨシ子に対し、「いや、もう要らない」と言ったのだ。私はとても感動した。なぜなら、葉蔵は彼のそれまでの生涯において、人から勧められて拒否したのは、この時ただ一度だからだ。自分を道化にして他人の顔色をうかがい、自分の意見を言えずに生きてきた葉蔵が、初めて自分の意見を述べたのである。私達にとっては当たり前出来ることかもしれないが、葉蔵自身にとってはやっと出来たことなのだ。私はこの葉蔵の姿に心打たれた。しかし、葉蔵はこの後、自分自身を「人間、失格」と言う。おそらく、葉蔵はそれまでの人生をまとめてそう言ったのだろう。しかし、この場面だけを読めば、誰もが人間として前に進んでいると思うだろう。作者の太宰治は、人間はたとえ道を踏み外しても変わることが出来ることを読者に伝えたかったのではないかと私は思う。

私はこの作品を読んで、自分は葉蔵と比べると十分幸せだと感じた。葉蔵のように自分の意見が言えないこともないし、食事をするのが苦痛だと感じたこともないからだ。世の中には葉蔵のように生活に対して様々な悩みを抱えている人が大勢いる。それでも必死



に生きているのだ。十分幸せな生活を送れている自分が不満を口にしたら、その人達に失礼だと思った。自分は幸せであるということをおぼえてはならないと思った。「人が人として、人と生きる」ことを深く考えることが出来た。人は一人では生きられない。誰かに支えられて生きているということをおぼえる。この本を手を取

て本当に良かったと思う。この本を読んで思ったことは、もっと友達・家族を大切にしていこうということだ。互いに支え合い、生きていきたい。そして、周りのことを考え、人の役に立てる、「適格な人間」になりたい。

## もののおふれる社会で — 『檸檬』 を読んで —

1年 建築学科 外園 初音

作者、梶井基次郎の生きていた時代。社会は今ほどものにおふれていなかったと思います。明治から大正、昭和と西洋から新しいものが入ってきたり、それらが日本独自の発展を遂げたりした時代だと思いますが、今のような電化製品は少なく、デジタルな娯楽の無い時代で、画面を通さず実物大の世界を楽しめた時代だと思ひます。

この作品の中で要になる言葉はやはり、題名にもなっている「檸檬」でしょう。私がレモンと聞いて想像するのは、さわやかで酸味のある匂いと、表面が少しごつごつざらざらとした形、匂いを裏切らない酸っぱい味。そしてなんといつてもあの黄色でしょう。しかし、この『檸檬』という作品を読むときには、これだけの知識・想像では十分ではないと思ひました。なぜなら、“私”はレモンの「重さ」を感じているからです。「レモンの重さってどんなものだろう。」という問いが私の中に浮かび上がったのです。

私の住む町には八百屋などありません。スーパーです。レモンはきつと置いてあると思ひますが、目に留まることはほとんどありません。ですが、レモンは身近だと思ひます。レモンの絞り果汁は、食品にかけたりドレッシングにいれたりします。カットされたレモンが食卓に添えられたりもします。しかし、身近なものには興味が湧きにくいのが人間の特徴だと思ひます。ましてや、レモンなど家庭で調理して口にすることが少ないでしょうから、スーパーで購入を目的として手に取ることも少ないでしょう。

ここで、レモンと同じような例をブルーベリーで挙げてみましょう。ブルーベリーはドリンクやスイーツなどで、「ブルーベリー味」として販売されています。しかし、ブルーベリーは現物をそのまま食べることは少なく、私がおぼえることはだいたいの色と味、大きさだけです。加工されたあとの食品は身近なのですが、その分現物を知らないというのが非常に多いのではな

いかと思ひます。

作者が生きていた時代、レモンとは現在ほど身近だったでしょうか。ふらつと歩いていた道で、そこに八百屋、または果物屋があつて、珍しいものがあったら手に取ってしまうのは想像に難くないのです。手に取つて感じるのは、手触り、皮をむかずに伝わる香り、そして重さなのでしょう。

しかし、“私”が感じたレモンの重さを私は知りません。私にとってレモンは身近ですが、だからこそ興味のわく対象ではなく、また加工されていないあのラグビーボールに似た物体をこの手で握つたことがないのです。だから、“私”が感じた「この重さ」というものが分からないのです。ただ、重い物であつてほしいという思ひがあります。「総ての善いもの総ての美しいもの」を重量にした時の重さが、軽いものであつてほしくないのです。旅館の一室の蒲団や蚊帳、浴衣、また花火やびいどろ。“私”の好きなものの総てをあわせて重量が軽いはずがないと私は思ひます。

もののおふれている時代、何もかもが飽和状態の現代で、私たちが何か一つのものをおぼえて真摯に向き合う機会は少ないと思ひます。一つの果物を手に取つて、それが何を表しているかなんて一々考えたりしないと思ひます。そんな現代社会だからこそ、ものを手に取つてそのものについて考える時間があつてもいいと思ひます。



## 『老人と海』を読んで

「老い」という事は、今の自分にとっては想像が難しく考えるのはまだ早い事だと感じていました。しかし、この本を読んだことにより、年を重ねるごとに起こる苦悩、喜び、偉大さ。様々な事を考えさせられました。

まず、私がこの本をパラパラと読み始めた時に、漁での臨場感、緊迫感が文字から伝わり、自分もその場にいるかのような気分になりました。私は普段小説、本に関わる事が少なく、スマートフォン、テレビなど直接映像を伝える物を使うことが多い生活です。だから本を読む事には少し抵抗がありました。しかし、いざ読んでみると映像では表現できない人物の表情、心情が文字から脳へ直接入っていき、本を読むのに夢中でした。

私は、本を読み終えて、老人の思い、意志など若い今の自分には理解しにくい所もありました。しかし、自分もいずれは必ず年を重ね、生きている限り老人になってしまう。そこで私は自分自身が年老いていった時どんな行動を取るのだろうと自分を見つめながら読み進める事にしました。

漁師は魚をとって初めて仕事になる。そんな仕事なのにずっと魚がとれない。年寄りだからと周りの人達からの言葉がかかる。そんな状況の中を老人は海へと向かい続けている。私はこの姿勢にとても胸を打たれました。何が彼をそうさせているのか。私は考えました。自分の立場なら漁をやめ、気楽に暮らす方が絶対に良いのに…そう思っていました。そんな彼の何よりの心の支えは少年の存在ではないのかと思います。老人サンチャゴの良い弟子でもあり、良き親友だったのではないかと思います。だからこそ、自分の格好悪い姿、心まで年寄りになる自分を見せたくなかった。

## 『レ・ミゼラブル』

貧しくて食べる物が全くなくて家族が飢え死にしそうな時、私は盗んででも食べ物を手に入れると思います。私と同じように、この物語の主人公ジャン・ヴァルジャンは一斤のパンを盗み、19年もの間、監獄の中で暮らすことになっていました。そのジャン・ヴァルジャンは監獄を出た後、ある一人の司教に優しくさ

## 2年 機械工学科 渡邊慎也

それが一人の老人が海へ向かい、漁に挑み続けることのできる動力の源だと考えました。ふと自分の立場に置き換えてみると、親友、ライバル。私にもそういった存在があります。何かは分からないけれど、そいつには負けたくない、勝ちたいと張り合ってしまう。しかし、自分の事も分かってくれている一番の味方でもあります。このようにサンチャゴも相手が少年だろうが、よい相手でもあり味方なのだと思います。この本を読み、そういった人の存在をまた改めて大事にすべきだと感じました。

「意志」この言葉が一番似合う人物がサンチャゴだと思います。物語の最後では、カジキマグロの漁に成功します。自分が負けたくない、やってやるという心を持ち続ける事の重要さに気づかされました。どれだけ周りの人に何か言われようが、自分の経験を信じてやり通す心。これが今の自分に足りていない部分、養っていかなければならない部分だと思っています。自分でやりたいと思って始めた事も誰かに負ければ、やる気が減ってしまう。何がなんでもやってやるという気持ちに欠けているのです。私は本当にサンチャゴのようになりたい。強い意志を持ちたいと思います。

私は、老いた時何もかも夢を諦めてしまうのだろうか。自分でも不安になります。しかし、あの老人サンチャゴのように意地でも何かをやり通す心。それを持てば私も老いに負けず夢を追いかける気がします。若い今の時期から諦めることを覚えずにやり通してみせる姿勢を貫き、サンチャゴのような格好良い老人になれるよう生活していきたいです。自分にやり通す事を教えてくれた素晴らしい本だったと私は思います。

## 2年 電気情報工学科 有馬夕貴

れ、心をあらため人のために生きていく事を決断しました。小さな勘違いで逮捕される事になったけれども正体を隠して頑張っていました。例えば、貧しい人たちのために働く場所を提供したり、子供を養うためにボロボロになるまで働いた母親を看病し、子供を助けたりしました。私だったら、ケチなのでそのような事

はできないと思います。大金を寄付したりは考えもしません。なんて私の心は汚いのだろうと思いました。

人に優しくする事で慕われ、市長まで登りつめたジャン・ヴァルジャンは、ある警官に目をつけられていました。ジャベールという男の人です。ジャベールはどんな状況、場面でもジャン・ヴァルジャンを追い続けました。私は、あんなにいい事をしていて優しい心を持った人を逮捕するのは何かおかしいと思い、なぜジャベールはジャン・ヴァルジャンを執拗に追いつけるのかわかりませんでした。とても冷酷な人間だな、と思いました。

ジャン・ヴァルジャンは悪い夫婦に預けられていたコゼットという少女を助け、自分の娘として愛し大事に育てていきました。コゼットもジャン・ヴァルジャンを実の父親のように愛していました。

コゼットはある青年に出逢いました。共和主義者のマリユスです。マリユスは仲間と共に自分たちの信念を貫きフランス革命を起こしました。警官がその動きを止めようと拳銃を出しても、仲間を信じ勇敢に立ち向かっていました。私は心を打たれました。その人たちの中には小さな子供もいました。みんなを守るために撃たれて死んでしまった人もたくさんいました。どうしてこんなに勇敢で正義ある心優しい人々が死ななければならないのか、と考えると、とても悔しく思いました。そして私はこのままでいいのかと考えさせられました。自分の意思はなく周りに合わせてばかりの私は、正しい事をしているのかわかりません。努力や

気合いが足りないなと思いました。

この戦いの中でジャベールはジャン・ヴァルジャンを捕まえました。しかし、ジャン・ヴァルジャンは大切な娘のコゼット、そしてその娘が大切に思っているマリユスを助けにいくためにジャベールに解放してほしいと懇願しました。私はあのジャベールが解放するわけないと思いましたが、ジャベールは、必ず戻るという約束で解放しました。ジャベールの中では、あの悪党のジャン・ヴァルジャンがこんな真剣な顔で助けにいかせて欲しいと懇願する姿に驚き、そしてこの人は本当に悪党なのか、自分のしてきたことは間違いであったのではないかと考えたのだと思います。でもやはり逃げるために嘘をついているのかもしれないと疑いの気持ちもあつたと思います。そう考えているとジャン・ヴァルジャンは本当に戻ってきました。ジャベールはその姿を見て涙を流し、自ら命を絶ちました。私はジャベールは冷酷な人だと思っていましたが、この人は規則を守ることが全てだったのではないかと思いました。本当はそんな生き方を望んでいたわけではなく、それでしか生きていくしかなかったのではないかと思いました。ジャベールも辛かったのだと思います。

私はこの本を読んでたくさんの涙を流しました。その涙は流して終わりではなく、自分を変える良いきっかけとなりました。みんな辛くても生きていて、私も頑張ろうと思いました。

## 『風立ちぬ』を読んで

2年 物質工学科 林田 美優

「Le vent se lève, il faut tenter de vivre.」ページをめくった時、まず初めに目に飛びこんできた言葉。これはフランスの詩人ヴァレリーの詩の一句で著者の堀辰雄はこの句を文中で「風立ちぬ、いざ生きめやも」と訳している。私がこの文を見て思い浮かべたのは、ジブリ作品「風立ちぬ」の広告でおなじみの「生きねば」という言葉だった。実の所私は「風立ちぬ」の映画を見ていない。しかし広告やテレビで見るとは戦争時代の話なのだろうと想像していた。そのためこの本も戦争にまつわるものだろうと思っていた私は読んだ時衝撃を受けた。話の内容が戦争とは全く関係なく、主人公とその婚約者との美しくも悲しい愛の物語だったからである。

正直、私はこの本を読み終えた時、話の内容がよく理解できなかった。それはおそらく巧みな情景・風景描写のせいではないかと考えられる。私はこれほど美しい描写がたくさん出てくる本に今まで出会ったことがなかった。読んでいてその場面の景色や人の感情が鮮やかに感じられ、まるで自分がそこに立っているような気さえた。本の内容を理解する以前に美しい描写に心を奪われ圧倒されてしまったのである。すっかりこの本の虜になった私は再び初めからページをめくった。

「私、なんだか急に生きなくなったのね…」「あなたのお陰で…」主人公の婚約者節子は、この時代では不治の病と称された結核であった。私は節子の言ったこ

の言葉に主人公との強い愛の力を感じた。この話は完全な実話ではないがモデルがいる。著者とその婚約者だ。私はその事実を知ったとき、何とも言えない気持ちになった。そして、自分もし主人公の立場ならどうするだろうと考えた。自分の愛する人が不治の病と知っていながらも何も変わらず接することが出来るだろうか。弱々しく変わり果てていくその姿を見て自分は何か言葉をかけることが出来るのだろうか——。主人公と節子の姿をみると、二人は互いに思いやり、ベッドごしに手を握り、言葉がなくとも目を見つめ合うだけで気持ちは伝わっている、そんな様子を読み取れる。不治の病とはいえ愛する人に変わりはない。私がもし主人公の立場になってもこの二人のように今ある幸福をかみしめながら過ごせればいいと思った。

この話は「序曲」「春」「風立ちぬ」「冬」「死のかげの谷」の五つで構成されている。そして「冬」からは文章の下に日付がつけられており日記のような書き方となっている。それによって節子の症状が日に日に悪くなっていく様子が余計はつきりと感じられた。また、この本に節子が亡くなる姿というのは書かれていな

## 十人十色の真相

『藪の中』の最大の魅力は三つの真実があるところだと私は思う。多襄丸の白状、真砂の懺悔、武弘の死霊の物語。一つの事件について当事者は三者三様の真実を述べる。しかし、結局は誰が犯人なのかはわからない。わかる事実は武弘が殺されたということ。それがこの作品をおもしろくしているのだと私はわかった。

『藪の中』はまず四人の目撃者がそれぞれ見たこと知っていることを述べる。この四人の話に矛盾や偽りはない。その後当事者の三人が真実を語り出す。最初は武弘を殺す気はなかったが、真砂に請われて武弘と闘い、殺したという多襄丸。武弘と共に心中するつもりで武弘を殺したが、自分は死にきれず清水寺に逃げ込んだ真砂。真砂が多襄丸に武弘を殺してほしいと叫ぶのを見た後二人がいなくなり、落ちていた小刀を自分の胸に刺して自殺したという武弘の霊。ここでこの作品は終わる。真相はわからず終いなのだ。

読み終えて私はすごくモヤモヤした気持ちになった。犯人は誰なのか。なぜ三人は同じ瞬間を共にして

い。「冬」で節子が亡くなり、「死のかげの谷」へと話に移るのだろうと考えられるが、私が節子が亡くなったと気づいたのは、「死のかげの谷」を読み進めて少ししてからだった。「何から何まで二人分ある。丁度お前と私とのためのように。」この場面を読んだ時私は思わず数ページ前から読み返し、節子の死を悟ったのである。主人公と節子、二人の最後の場面は節子が主人公の髪を撫でながら終わっている。節子の最期は描かれていないがこの場面から推測するに、きっとおだやかで主人公と幸せな最期を迎えられたのではないかと私は考えた。

この本を読んで「生」とはなにか、「死」とは何かというものを深く考えさせられた。生きているものについてのは必ずやってくる死。今は「死ぬ」ということについての実感は正直ない。だが現代では病気に限らず交通事故、殺人、自然災害など考えればたくさんの「死」につながるものはある。いつ何が起るかわからないこの世の中、家族や仲間を大切に、元気でいられることのありがたさをかみしめながら生きていかなければならないと感じた。

## 2年 建築学科 片平千陽

いながら違う真実を話すのか。それぞれの武弘が死に至るまでの心境や行動には納得できる。だが、その三つ合わさるとそうもいかない。気がつけば私は真相について考えこんでいた。この作品にはまっていたのだ。

誰が嘘をついているのか。一人が真相を話したのならば、あとの二人が嘘つきなのか。もしかしたら、目撃者の四人のうちの誰かも嘘をついているのかもしれない。作品に登場する全員というのもありえる。

私は多襄丸が犯人だと考えた。しかし、その考えはどんどん覆される。誰の言葉を信じればいいのか。武弘の場合は巫女がそっくりそのまま武弘の真実を語ったかも怪しい。矛盾ばかりだが、真砂が殺したのは武弘だと思う。多襄丸に気持ちが傾いてしまい心の中で殺したのだ。そして武弘が自殺したというのは、殺されたと同時に心が壊れてしまったのだと思う。

私の考えに真相はつじつまが合わないかもしれない。納得できない人もいるだろう。しかしそれでも良いのだと私は気づいた。作者は読者に対して真相解明

を求めてはいないのだと思う。当事者の三人が自分の何かを守るために都合の良い真実を語っている。読者は三つの真実を自分なりに読み解き、真相をつくり出して良いのだと思った。真砂の真実を真相として読んでみたり、武弘の立場に立って読んでみてもおもしろい。三つの真実が魅力となっているのはこういうところだと私は思った。

「あなたは、どう真相を創り出すのか。」という作者からのメッセージが込められているようだと私は思った。『藪の中』は様々な目線から読め、本当の真相はわ

からないが、自分が読んで、考えて、感じたままに真相を見出すことができる。その面白さが、この作品を読んで私はとても感じられた。これからたくさんの本を読んでいくと思うが、ひとつの目線、主人公目線だけでなく、他の人物の目線や思考、客観的に読むとより面白くなるだろう。また、この場合が真逆の状況になっていたら物語はどう展開されるだろうか、など想像をふくらませる。そのようにして読むことで作品を深く味わい、飽きることなく、本を楽しむことができると思う。

## 『怒りのぶどう』を読んで

私がこの本を選んだのには、大きな理由は無く、夏休みで祖母の家に行ったときに、たまたま目についたとしか言いようがない。だが、読み進めていくうちにのめり込む自分が居た。

主人公は、ジョード家のトム。殺人罪で懲役七年、四年服役して帰郷すると、ジョード家はもぬけのから。大地主に土地を追い出され、カリフォルニアに出発する寸前だった。仮出所のトムと偶然再会した説教師ケイシー、ジョード一家のカリフォルニアへの旅が始まる。

最初旅が始まったときは、13人の大所帯からだったのに、途中で祖父、祖母が亡くなり、長男（生まれつきの精神虚弱者）は、コロラド川下流方面へ「魚を取って生きる」と去ってしまう。長女の夫は大変な生活に耐えられなくなり、家族の元から逃げてしまう。

ジョード家は、良い暮らしを求めて新天地へ向かうが、結局は裕福な大地主に搾取され続け、彼らの生活はいっこうに楽にならない。説教師のケイシーは、組合を作ろうと活動し殺害され、そこに居たトムは、ケイシーを殺した人を殴り殺し、また罪を犯した。

怒りのぶどうはアメリカの不況の時代に書かれた小説とのこと。1930年代は大変な不況にみまわれたのだ。小説の登場人物たちは決して想像の産物ではなく、実際そのような人間が多く存在したのだと思う。

ジョード家の人々は、一人、また一人と仲間、家族を失うなかでも、人としての尊厳を忘れることなく、他人を、家族を思いやる気持ちを持ち続ける。そこには淡々と生活している姿がとても美しく映っている。

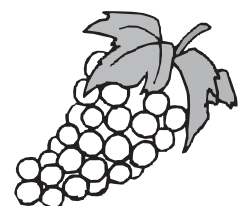
私が一番感動したのが、長女のローザシャーンが逃げた夫のコニーとの子供を死産したにもかかわらず

3年 機械工学科 佐多勇亮

ず、たまたまたどりついた住居の男性が死にかけているのを目にして、母乳を与えたところだ。自分のおなかの中に身ごもった子供が死産して落ち込んでいるにもかかわらず、何の関係もない他人を救うためにためらいもなくされた行為だ。そしてその行為は、ローザシャーン、トムの母親も望んだことであり、この暗い物語の太陽となっているのは、実は母親なのではないかと感じている。

私はこの本を読んで、この本の書かれた時代は80年以上も前のアメリカのことだが、現代でも通ずるものがあるのではないかと思う。権力や富が世の中を動かしているのは現代でも同じような気がする。私は富や権力について批判的ではないが、それを振りかざして生きていくのは、人間としていやらしいと思うし、一生懸命生きている人たちはとても素晴らしいと思う。怒りのぶどうは、暗い物語ではあるが、淡々と生きることの大切さというのも学んだ気がする。

最後に、どうして「怒りのぶどう」なのかについて考えてみた。しかし何故かはよくわからない。ただ、ワインを作るのにはブドウが必要で、ブドウはジョード家の人々のような、富裕層からただ良いように扱われる人々のことではないのかと感じている。



## 『コペル君』のおなかのなか

本選びに迷った後、『君たちはどう生きるか』というタイトルに熱いものを感じ、次の瞬間には係の人に判子を押してもらっていた。この読書感想文の題は本の主人公といえる『本田純一』君のあだ名である。どうしてこんなあだ名になったかについては一度この本を読んでもらったほうがわかると思う。読み進めれば感動できる話や共感できる話、そして改めて考えさせてくれる場面がいくつかあり、とても良い本だといえる。

この本を読み始めて、最後まで読み、おもしろいと思った『書き方』があった。本にはいくつかのチャプターのようなものがあり、その中の構成でよくあったのが、物語や出来事があり、それについてコペル君の思ったこと、そしてそれに対するおじさんの考え、これが手紙で会話をしているような書き方なのだ。おじさんについても本を読んでもらえるといいのだが、簡単にいうと近所に住んでいるコペル君のおかあさんのほんとうの弟である。とても仲がよく色々な話をするのだが、コペル君は中学生ながらその年でそんなことを考えてるのかというほど物事に対して深くしっかり考えていて、またその考えに対するおじさんの話がとても心にくるのだ。実際には手紙ではなく、時がたってからおじさんの考えはコペル君に伝わるのだが、読んでいる側は手紙のように思えるかもしれない。少なくとも僕は手紙のようだと感じた。

僕が一番感動した話を紹介しよう。それはこの本の6章にあたるであろう『雪の日のできごと』から7章の「石段の思い出」である。雪国の人はそうでもないと思うが、雪が珍しい地域では降ることだけでもテンションが上がるのに、積もってしまったらもう、それで遊ばない人はほとんどいないのではないだろうか。ましてコペル君たちはまだ中学生である。楽しくてしかたがないのである。しかし、そんな楽しい時もつか

3年 電気情報工学科 今別府 輝 人

のま、コペル君の友だちは、五、六人の上級生にかこまれていた。なんでも夢中になっていたために上級生のものと思われる雪人形を少しこわしてしまっただ。謝れと言われ友だちは謝ったのだが、声が小さいからはっきり言えやら文句を言われた。次にはっきりした声で謝るやいなや生意気と言われる始末。とても理不尽だ。友だちをかばうように別の友だちも弁解を求めるが意味もなく、殴られてしまった。コペル君はある約束を思い出すが一歩が出せず、とうとう見捨てる形になってしまった。暗い暗い世界に落ちこんでしまうのだ。ここからのコペル君の考え、思い、おじさんの返答、そしておかあさんの昔の話、これがとても感動でき、共感ができたのだ。ぜひ読んでほしい。

長くなったが自分の思いを書こう。やはり理由の有無に関係なしにいじめはだめである。和解、もしくは妥協が必要だと思う。そして約束を守れなかったときの例えようなないつらさ。これは自分にも似た経験があり、目の奥が熱くあることを認めざるをえなかった。コペル君ほど負の暗い世界には落ちなかったが、何か他の事を考えることをやめるとすぐその後悔が脳裏をよぎり、つらくなるのである。そしてコペル君のおかあさんの言葉になるほどと言わざるをえなかった。『人間が知ってくれないばあいでも、神さまは、ちゃんと知ってくださるでしょう。』この言葉にどれだけ救われるか。後悔した出来事、そのときの自分の言動だけ思えば取りかえしがつかないこともあるが、そのおかげで肝心なことを心にしみとおるように知ることができれば、ありがたいことなのだ。

これからどう生きていくか。それを見つけることが人生という人もいる。後悔のない人生なんてないのだろう。しかし、後悔で終わらせず何かを知ることができれば、良い人生を歩むことができるのであろう。

## 『戦争と平和』を読んで

私たちは好きなことをしている時に「幸せ」を感じることが一番多いだろう。人間は自己愛が最大に感じられる環境こそが幸せに思いがちだ。しかし、本当にそうだろうか。

この本に登場する貴族の庶子のピエールは父の急死

3年 建築学科 草野 諒 太

で莫大な遺産を相続し大富豪となり、自分の手に入らないものはないと思った。しかし得たものが多ければ多いほど、幸せになれるとは限らない現実自分が何のために生きているのか分からなくなる。完璧な環境の中でも幸せを感じられないことがある。一方で彼の

親友、アンドレイは勇敢な軍人だったが戦地で活躍できず挫折を味わう。自分の名を世界に轟かすことが生きがいだと思っていたが、目標を失った。つまり、自己愛を追求しても思い通りにいくとは限らない。絶望に打ちひしがれていた彼は自分の殻に閉じこもり、孤独な日々を送っていた。そんな時に、天真爛漫な少女ナターシャと出会い、自然の美しさに触れるうちに考えが変わっていった。人間と人間、人間と自然が互いに影響する中で、生きる力は生まれるのだと感じていたように見えた。しだいに仲を深めていった二人は婚約したが、離れて暮らすうちにすれ違いが生じ、婚約は破棄同然となる。心に傷を負ったアンドレイは再び戦地へ。他人のために尽くすことの大切さを知ったナターシャは、負傷兵の手助けをするようになった。そんなある日、重傷を負ったアンドレイと出会う。互いの過去を許し合った二人だが、アンドレイは看病の甲斐なく死んでしまう。ピエールは捕虜にされたが、そこで出会った貧しい農民兵カラターエフの生き方を見て気づく。自分のこれまでの不幸は、必要以上の自由から生じていたと。苦しい行軍の果てに解放され、ナターシャと再会したピエール。二人の会話は新しい幸福への始まりへ近づいている様に感じた。そして二人は、互いに尊敬し合い結ばれ、家庭を築く。

この本では、人間の美しさを考えさせられた。前半では、アンドレイの真理「なぜ人は殺し合うのか？」に迫った。負傷したアンドレイに代わって後半は、ピエールの真理「なぜ人は愛し合うのか？」に迫っていた。ナターシャを含めた三人は、戦争に巻き込まれながらも、それぞれが成長し、生と死、そして愛の意味を知ることができた。幸福を追求することで、殺し合い、愛し合うのが人間なのかなと思った。外見や性格は正反対の二人だが、頭の中にある考えは全く同じで生きているように思えた。特に、登場する人物のほとんどが「どうすれば」という考えで生きているのに対し、常に「なぜ」と問いかける姿が印象的だった。当然、周りの者から浮いていたが、相手にしない辺りも自分をしっかり持っているなどと思った。

このようなことから、私は自分を信じることの大切さを学んだ。私たちは、決まったレールから外へ出されると諦めてしまうことが多い。しかし、そこから別の新しい生活が始まる。そんな時、生きている間は生きる可能性を、幸福になる可能性を信じて生きられるようにしたい。つまり、自分を信じることだ。それが全てではないかもしれないが、自分を信じることで幸せの人生に一歩近づくのではないだろうか。

## 自由を求める力 — 『箱男』 を読んで —

3年 物質工学科 川崎夏鈴

「箱男」とは、男がすっぽりと箱をかぶり身体を社会から隠蔽し、社会にその身を置いているが、一切の帰属を捨て去ることが出来る存在だ。この作品は、「箱男」が増え続けている世界で、ある「箱男」の視点によって綴られる自由を探す物語である。

男は、なぜ「箱男」となったのだろうか。また、「箱男」となって何を得ようとしたのだろうか。私は「箱男」になると社会との繋がりを失うが、自由を得ることが出来る考える。男は自由を求めて「箱男」になったと思う。一度箱に入ると、人との繋がりも仕事という繋がりも全て消える。しかし、箱の中では全て自由なのだ。好きな時に好きな事を行い、嫌なことは行なわなくて良いのだ。それならば、部屋に引きこもれば良いのかもしれない。しかし、部屋では駄目なのだ。今日では、誰がどこにいるのかすぐに分かってしまう。このような他人から見られている環境では、決して自由とはいえないのだ。「箱男」は一度箱に入ると、他

人からは一切姿は見えない。箱に空けた穴から、自分のみが見ることが出来るのだ。私も男のように、誰からも見られず過ごせる時間がほしいと思うことがある。日常の生活から逃げ出したいくて、自由がほしくなるのだ。しかし、私が求める自由は一時でいい。「箱男」のような長い自由は求めていない。つまり、それほど男は「箱男」に魅力を感じていたのだ。私は、作者が私たちが男のように「箱男」に歩ませようとしていると思った。

また、物語の中で「箱男」は一人の女と出会う。その中で男は、「彼女が、もし、本気で僕を知りつくそうとしてくれるつもりなら…たしかにもう箱なんて無くてもいい。」と言った。ずっと箱の中で生活した「箱男」が選んだ道は、箱の外だったのだ。そこで私は、自由とは何だろうと思った。最初「箱男」の自由は、誰からも見られず自分のみが見ることだった。しかし、見て見られる自由へと変化したのだ。私は、「見

る」と「見られる」は正反対のようで最も近い存在だと考える。人は、見るという一方通行の思いでは満足できないと思う。相手を見て相手から見られることで、初めて通じあうことが出来るのだ。私もこの自由に同意する。苦しい時や自由を求めている時、一人で過ごしていても何も見えてこない。だが、誰かと一緒にいることで私は自由を感じる事が出来るのだ。

作者はなぜ「箱女」ではなく、「箱男」にしたのだろうか。物語の中で「箱男」となったのは、男のみだった。なぜ、女は箱に入ろうとしなかったのか。私は女は箱女になりたくてもなりきれなかったのだと思う。箱の中で生活することは、自由を求める心の強さが必要だ。女は、外の世界の便利さに自由を求める力が負けてしまったのだ。

私は物語を読み進めるうちに、記録しているのは誰なのだろうと不思議に思った。「箱男」が記録してい

たはずが、記録の中の登場人物へと変化してしまう。その間は、私が「箱男」たちを記録していたのだ。私は「箱男」や女が記録を放棄したということは、現実の中で自由を見つけ出したと考える。記録という「見る」から、現実の「見る」「みられる」世界に戻ったのだ。私も「箱男」や女のように、私の自由を見つけ出したい。

「箱男」が求めた自由とは何だったのだろうか。自分以外存在しない箱の中で見つけたその自由とは、他人と共に生きることだったのだ。私は、「箱男」から自由を学んだ。一人で過ごしていても何も見えない世界に、「見られる」ことによって光が得られたのだ。私はこれから、「箱男」のように私なりの自由を探していきたい。そして、その中で自由を求めて力強く生きたい。

## 『津軽』を読んで

私は、これまで太宰治という人についての知識などほとんど皆無に等しく、彼が入水自殺を図ったという事実や、代表作の「人間失格」や「斜陽」などのタイトルから、勝手に暗いイメージを持っているくらいであった。しかしそんなイメージも、この作品を読み終えた今、全くと言っていいほど違うものになった。太宰治という人は、こんなにも明るく、豊かな感情を持つ人だったのかと。

この作品は、津軽風土記の執筆を依頼された彼が三週間に亘って故郷の津軽を旅した紀行文のような作品である。作品全体を通して、彼が故郷を愛する気持ちが本当によく伝わってくる。序編では、津軽や弘前の悪口を重ねながらも、故郷を誇らしく思う気持ちや故郷の素晴らしさを読者に分かってほしい、といった思いを感じさせる文がいくつもある。それを最も感じたのは、「なんと言っても、私は津軽を愛しているのだから。」という文である。彼が自分の故郷に対して、「太宰治」としてではなく本名の「津島修治」として心から思ったことなのではないだろうか。彼の素直さが表れる部分に触れることができ、嬉しく思った。また、彼はこの地へ十年も帰っていなかったのに、故郷を大事にする気持ちは薄れているどころか大人になってより一層深くなっているようにも感じられた。彼はその後の人生でも津軽を大事に思い続けたのではないだろ

### 3年 物質工学科 栗山 愛理

うか。

彼が旅を始め、懐かしい友人と再会して色々なやりとりをする場面では、津軽人の温かい人柄や、彼の明るくユーモア溢れる一面にも触れることができ面白かった。全く飾らず、自分のことを淡々と客観視するような場面は、不器用さを含む彼の「素」の部分が感じられ、親近感さえ湧いてきた。

さて、彼がこの旅で本当に目的としていたものは、育ての親とも言える、たけとの再会であったのではないだろうか。彼が幼少の頃たけと暮らした記憶は、たけが彼の前から突然姿を消したときから三十年近く経ったその時まで、愛しいものとして彼の胸に深く刻まれていたように感じた。「私の一生は、その人に依って確定されたといっているいいかも知れない」とまで言うてしまうくらい、彼にとってたけは大きな存在だったのだと思う。たけのいる小泊という土地へ向かう道中の場面では、彼女に早く逢いたいと切に願う気持ちがよく伝わってきた。最初は「でも、逢えるかどうか」と不安を口にしながらも、心のどこかでは絶対に逢うのだという強い思いを持っているように感じられた。たけを探しきらず一度は再会を諦めかけるも、たけの家に偶然帰ってきた娘のおかげで逢えることになる。ついに再会を果たした時、彼の心は幸せな気持ちで満たされたに違いない。一言に幸せと言っても、



作中で「平和とは、こんな気持の事を言うのであろうか。もし、そうなら、私はこの時、生れてはじめて心の平和を体験したと言ってもよい」と述べているように、優しく、心に染みるような幸せではないだろうか。私は彼とたけの思いが通じたように感じられるこの場面が一番好きだと思った。彼は、たけと逢うべくして逢ったのだ。そう感じさせる何か運命的なものがそこにあった。同時に、たけの娘が二人を引き合わせてくれたようにも思えた。

彼が、母親のいる有り難さを述べている部分から感

## 連帯するこれから

連帯とは、二人以上が連合して事に当たり同等の責任を帯びることである。近代社会においてその理念は大事なものであるとされてきた。しかし、現代史の中で「連帯」は衰弱し続けたと筆者である内山節さんは述べていた。たしかに現代社会では、個人の責任がほとんどで、人々は自分の世界を守ることに必死なのだろう。

この課題を考えるためにまず上げられるのは、「自然との連帯」である。近代・現代的な連帯ではこの部分が抜けていたようだ。自然と人間との関係は複雑である。例として群馬県の上野村があげられていた。ここは、イノシシやシカ、サルなどによる畑の被害に悩まされ、これらの動物を害獣として扱うほかなくなった。自然の立場から見るとシカは山に生えるササや木の皮までも食べ尽くし、山は枯れ木が広がり、土から出た草や木の芽も食べられ山の砂漠化を進めている。山はいかなる生物も暮らせない場所になってしまう。こうなると、シカは自然にとっての害獣である。では、人間はどうだろうか。山村は山を開き作ったのだから、自然の領域を人間も侵しているのだ。私の住んでいる所も四方を山で囲まれていて、全く同じような状態である。人間と自然は共存・互恵・対立という関係が絡み合い展開してきた。「連帯」するということは自然の持つ「禍」の部分も受け入れるということなのだ。

これらのことは、これからの社会に必要な考えになる。例えば労働と労働、労働者と労働者の連帯である。私はアルバイトの経験があるが、これはとても大切な考えであると思う。私が勤めていた店にはもう一人アルバイトがいた。しかし、その人はなんの連絡もなしに店に来なくなったため、私を含め多くの人が迷

じることがあった。母親とは、子供の世話をするだけに在るのではない。子供の本当の心の拠り所となり、何も言わずとも、ただそこにいてくれるだけで子供に安心感を与えることのできる、そのような存在なのだということだ。私も彼のように母を大事に思う気持ちを忘れずに生きていきたい。

彼について知る最初の作品が「津軽」で良かった。彼のありのままの姿を知った今、親しみを持って他の作品に触れたいと思う。

## 3年 物質工学科 新 朋 香

惑した。これは労働者同士の連帯が取れていないいい例ではないだろうか。働くということは、このような矛盾とどのように付き合っていくかが大切な考えであると思う。

近代社会が失ったものは生命と生命の結び付きである。経済活動の中で全てのものが商品化され、商品として市場でやりとりが行われる。例えば農作物は自然や農民の生命活動を通して作られているが、私達消費者は、それがどのようにして作られたか、誰が作ったのかさえ知らない。商品を作る人間たちもまた、作物と同じように商品として扱われ、使い捨てられる労働力となってしまった。このような考えは、非正規労働者を増加させる原因になっていると考える。今では大手の企業でさえ倒れてしまうような時代である。企業側は、正規労働者よりも賃金が低く保障もそれほど考えなくてよい非正規労働者を使った方がメリットがある。また、経営難などで人件費を削減させるには、非正規労働者をやめさせるのが手っ取りばやい。2012年の就業構造基本調査によると三人に一人の割合で非正規労働者がいるようだ。雇う側には有利だが働く側としては大変である。これらの雇用状態の改善がこれから最も大きな問題になるだろう。

「連帯」という言葉の意味を見つけ出すことが、現代社会の問題を解決する大きな鍵になると思う。人と人、人と自然・高齢者と若者…様々なものや、人との関係のあり方を見つめ直し、互いが利益を生みだせるような互恵の関係を作り出せる世の中になればいい。今一度、自分の立ち位置を考え、世の中に貢献していきたい。

『怯えの時代』 内山 節 新潮新書

去る、平成27年12月16日(水)、特活の授業を利用して、外部講師による講演会を開催しました。この講演会は、1年生を対象にした、学生の読書に対する啓発の一環です。今回で7回目となります。

講師の田代義博先生(NPO法人都城歴史と文化のまちづくり会議:理事長)から、『都城の歴史あれこれ』と題して、次の内容の講演を頂きました。

#### ◎都城の歴史に関わる人物(ビッグスリー)の紹介

##### ①島津忠久(鹿児島島津家の初代)

- ・初めはこれむね惟宗忠久と言ったが、島津が都城の管理者と成ったため、姓を島津に改めた。
- ・島津発祥の地は、都城説と鹿児島出水説がある。

##### ②北郷資忠(都城島津家の初代)

- ・資忠は、鹿児島島津家の四代忠宗の六男であり、現在の福岡空港付近の金隈合戦で手柄を得た。
- ・山田町付近に幕府から300町を与えられ、山田薩摩迫に入った。

##### ③北郷忠相(都城島津家の八代:最大のヒーロー)

- ・都ノ城(現在の歴史資料館)と安永城(庄内町)の二つの城を引き継いだ。
- ・以後も戦い続けて都城盆地を統一し、都城の政治、文化、経済等の土台を築いた。
- ・忠相が着用していた鎧兜は、都城島津家の家宝である。

#### ◎伝統行事にも歴史がある

- ・都城盆地の神社で行われている、六月灯にある灯籠が歴史を伝えている。

本校の学生のために非常に有意義な講演を頂きまして有難うございました。学生は、改めて都城の歴史に係る島津家のビッグスリーを知ることができ、興味深く聞き入っていました。

#### 【田代義博先生のプロフィール】

- ・出身:宮崎県串間市市木
- ・職名:NPO法人「都城歴史と文化のまちづくり会議」の理事長
- ・略歴:宮崎県高校国語科教員として、県内の高校及び県教育委員会等に勤務され、平成19年3月小林高校校長で定年退職。以後、様々な役職を歴任され、現在に至る。
- ・著書:歴史小説の『都城の乱』、『北郷忠相』、『三州風濤』、『姫芙蓉』、『都城幕末伝』などがある。(この5冊は、本校図書館に所蔵していますので、是非読んでください。)
- ・脚本:『緑の奔流 前田用水物語』、『酔くれ山法師』などがある。
- ・受賞:「社会奉仕賞」都城北ロータリークラブ(平成22年4月)  
「都城市文化賞」文化功労部門(平成26年11月)



# 今年度の活動と来年度の図書委員会について

学生図書委員長 徳 丸 唯  
副委員長 宮 崎 愛美麗

今年度の図書委員では、ブックハンティング、テーマ展示、オープンキャンパス、深山書評などの活動を行いました。

前期に実施したブックハンティングでは、図書委員が各クラスの希望のもと、宮崎市内の書店へ向かい購入に当たりました。クラスの希望に加え、専門書やその他の小説なども追加し、図書の充実と、学生が自分で探し選ぶことで書籍に触れるいい機会になったと思います。その後、図書委員が、ブックハンティングで購入した図書のレビューを書いた冊子を作成し、各クラスに展示しました。それぞれ、おすすめの点などを記載してあります。図書館入り口にも購入した図書と一緒に置いてありますので、是非手に取って見てください。

オープンキャンパスでは、主に中学生を対象にいろいろな企画を行いました。普段見ることのできない閉架書庫ツアーでの司書さんによる解説や、図書館にある本から出題するクイズラリーなどを実施し、図書委員による手製の葉をプレゼントするなどしました。中学生だけでなく同伴の保護者にも楽しんでいただけたと思います。

そして、後期に開催した深山書評では、あまり応募数は伸びませんでしたが、良い作品があり表彰式も無事終了することができました。昨年度と同様、期間を延長して行いましたが、来年度に実施する際にはもう少し応募数が伸びることを期待します。

できるだけ利用数をふやしたいと思っていましたが、あまり成果が出なかったのが残念でした。図書委員の活動を通して、小説だけでなく、高専だからこその各学科に特化した他の図書館とはまた違う「高専の図書館」というところを、学生の皆さんが知っていただければ嬉しいです。

## ブックハンティング実施される

2015年6月27日(土)に、ブックハンティングに行ってきました！

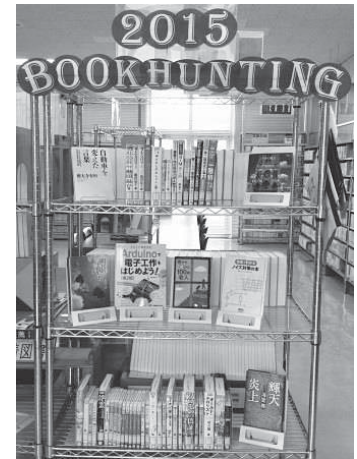
ブックハンティングとは、各クラスの図書委員が図書館に並べてほしい図書、他の学生に読んでほしいと思う図書、クラスの学生からのリクエスト図書などを、大型書店で実際に選んでもらう選書ツアーです。今年は17人の学生が参加しました。

14時に宮崎市内の蔦谷書店宮崎橋通りに到着し、約2時間かけて選書しました。図書委員は本校の代表として、時には中身をじっくり読みながら、真剣に図書を選んでいました。

話題の新刊小説ばかりでなく、各学科に関する専門図書や資格試験に関する図書など幅広い種類の図書が選書されました。学生目線で選書された図書です。きっと皆さんのところに響く1冊が見つかるはずですよ。

選ばれた72冊の図書は、新着図書コーナーのブックハンティング棚に配架しています。すぐに借りることができますので、ぜひ図書館へお立ち寄りください！

また、図書委員が選書した図書のブックレビューを作成しました。冊子にして、各クラスおよび図書館に設置しています。そちらも、ぜひチェックしてみてください！



## ブックハンティングで購入した図書一覧（一部）

2015. 6.27 実施

書名	著者名	請求記号
ロゴスに訊け	池田 晶子	104   14
自分はバカかもしれないと思ったときに読む本	竹内 薫	159.7   44
ぼくらの近代建築デラックス!	万城目 学	523.1   44
イラスト建築不静定構造力学入門	岡島 孝雄	524.1   44
基礎からわかる間取りの読み方描き方教室	菊池 理夫	527.1   44
誰も教えてくれなかった家づくりの「本当のこと」：疑問・不安に答えてくれる「家づくりソムリエ」と建てる	佐々木 秋雄	527   44
新世界の家	Schmid Bernhard M.	527   44
自動車を変えた言葉：クルマとともに疾走する徳大寺有恒半生の記録	徳大寺 有恒	537   44
アニメで見た空と雲のある風景の描き方：デジタル作画法	Bamboo	778.77   Bam
明日の子供たち	有川 浩	913.6   74
君の臍臓をたべたい	住野 よる	913.6   74
朝が来る	辻村 深月	913.6   74
吉祥寺の朝日奈くん	中田 永一	913.6   74
禁断の魔術	東野 圭吾	913.6   74
天空の蜂	東野 圭吾	913.6   74
ライオンの歌が聞こえる	東川 篤哉	913.6   74   2
いつかぼくが帰る場所	Heller Peter	933   Hel
窓から逃げた 100 歳老人	Jonasson Jonas	949.83   Jon

## 第三回「深山書評」実施される

「深山書評」とは、本校の学生が図書館に足を運ぶ機会を増やして、より多くの本に触れてほしいという図書委員の強い思いから発案され、2014年度から実施している、学生図書委員会主催の書評コンテストです。

三回目の実施となる今年度の「深山書評」には、2016年1月18日(月)の締め切りまでに、多数の応募がありました。「この本を読んで欲しい!」という気持ちが伝わる、応募者の熱意が感じられる作品ばかりでした。

図書館長および学生図書委員から選出された4名の学生審査員で選考した結果、図書館長賞1名、深山賞1名、優秀賞2名、優良賞2名の計6名の受賞が決定しました。受賞者の皆さん、おめでとうございます。受賞作品は、次の通りです。

賞	作品名	書名	著者名	出版者名
図書館長賞	「道草したくなる小説、『植物図鑑』を読んで」	『植物図鑑』	有川浩	角川書店
深山賞	「小夜曲」	『アイネクライネ ナハトムジーク』	伊坂幸太郎	講談社
優秀賞	「君の臍臓をたべたい」	『君の臍臓をたべたい』	住野よる	双葉社
優秀賞	「星の王子さまを読んで」	『星の王子さま』	サン＝テグジュペリ	新潮社
優良賞	「依存と自分の心」	『依存症のすべて』	廣中直行	講談社
優良賞	「真実と挑戦」	『君の臍臓をたべたい』	住野よる	双葉社

受賞者については、各クラスに掲示してお知らせしています。

そして、2016年1月29日(金)には、図書館第一閲覧室で表彰式を行いました。受賞者には、賞状と副賞として図書カードが授与されました。最後には、賞状を手に記念撮影を行いました。

今回の応募作品は、冊子にして各クラスに配布する予定です。ぜひ、読んでみてください。この書評を通して、学生のみなさんと本が、ひいては学生のみなさん同士がつながり、輪が広がっていくことを願っています。

この「深山書評」は、来年度も継続して行う予定です。今回、受賞を逃したみなさん、応募できなかったみなさんの力作を期待しています。



# 図書館からのお知らせ

## 図書館開館予定について

今年度の夜間開館は、平成28年2月25日(木)までです。

(なお、平成28年度の夜間開館は、4月6日(水)の開始予定です。)

次の期間は、平日のみ開館します。

期 間：28年2月26日(金)～4月5日(火)

開館時間：9時から17時まで

## 学年末・春季休業中の長期貸出について

通常10日間の貸出期間を学年末並びに春季休業中は、長期貸出とします。

貸出開始日：平成28年2月16日(火)

返 却 日：平成28年4月 6日(水) 始業式

帯 出 冊 数：一人7冊まで



## 編／集／後／記

図書館だよりNo.78をお届けいたします。

今回の図書館だよりには、本年度をもって退職される河野先生、樋渡先生から玉稿をお寄せいただきました。ご多忙中のところご協力いただきました先生方には、この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

例年実施している校内読書感想文コンクールの入賞作品を掲載しました。入賞作品は、1年生～3年生の作品から選ばれた力作揃いで、昨年12月の全校集会で表彰されたものです。ご多忙中、学生の読書感想文をご指導下さいました国語科の先生方に厚くお礼申し上げます。

1年生対象の講演会では、講師に田代義博氏(NPO法人 都城歴史と文化まちづくり会議：理事長)をお招きしました。「都城の歴史あれこれ」と題して、ご講話をいただきました。

春休み中も図書館は開館していますので、春の陽だまりの中、静かな図書館で是非読書に励んでください。皆さんのお越しを、スタッフ一同待っています！